



ふくりゅう

特定非営利活動法人
日本下水道文化研究会会報

発行責任者 酒井彰(運営委員会代表)

平成19年7月15日
通巻52号

第9回 下水文化研究発表会開催のご案内 『地域社会から受容される技術協力』をテーマに

第9回下水文化研究発表会を下記の企画で開催いたします。

1. テーマと趣旨

日本下水道文化研究会では、地球環境基金の助成を受け、2004年度よりバングラデシュ農村域において資源循環型のエコサン・トイレの導入事業を実施してまいりました。衛生改善とし尿の資源循環の見通しが得られ、地域社会からも受入れられつつあります。さらに、現地パートナーの協力を得ながら、新たな広がりの可能性も生まれてきているところです。本年度からは国際協力機構の草の根技術協力事業として採択され、手続き・準備を進めています。また、来年は「国際衛生年」でもあります。本会のこれまでの活動で得られた成果を共有し、今後、衛生分野での国際協力にどのようにかかわっていくかについて、関係者をお招きし議論したいと思っております。

今回は、4年ぶりの東京開催となります。2年前の大阪での熱意と盛り上がりを経験できるよう、「下水文化史」、「下水文化活動」、「下水文化研究」、「海外下水文化」の各分野における会員各位の研究成果をふるって応募いただきますようお願い申し上げます。研究発表については、じっくり発表でき、多くの方が聴講できるように配慮するつもりです。研究発表会翌日には、「小平市ふれあい下水道館」を中心として「下水文化を見る会」を開催します。

2. プログラム

日時：11月17日(土) 9:20-17:00

会場：日本水道協会会議室(日本水道会館)

基調報告：

「バングラデシュ農村域における資源循環トイレ導入の経験と展望」(海外技術協力分科会)

パネルディスカッション：

「地域社会から受容される衛生技術とは？」

- ① 開発途上国での衛生の実態
- ② バングラデシュ農村域における地域ニーズと技術の選択
- ③ 普及にあたっての課題
- ④ 技術支援・技術移転のあり方などを議論します。

研究発表

下記の分野から募集します。記載のキーワードにとらわれずふるって応募ください。

- ① 下水文化史：下水文化(し尿、トイレ、ごみ、排水、水の使い方、活かし方)の歴史など。
- ② 下水文化活動：下水文化の普及活動、流域の上下流交流、下水道事業における住民参加など
- ③ 下水文化研究：水環境・水資源・水循環の総合的管理、上下水道事業の経営、民営化など
- ④ 海外下水文化：これまでの海外技術協力の経験、課題、途上国の実状に適した技術、これから技術移転のあり方、海外の水文化・水事情など

- 発表時間は1件30分を確保できるようにします。
- 各分野ごとに発表会場を設け、分科会とするものではありません。参加者ができるだけ多くの発表を聴けるように配慮します。

展示コーナー：バングラデシュで導入したトイレの模型、活動記録の写真などを展示します。

下水文化を見る会：体験型野外博物館を巡って(仮題)

日時：11月18日(日)、午前10時ごろより

コース：玉川上水を散策しながら、小平市「ふれあい下水道館」、「江戸東京たてもの園」などを巡る予定です。

※ 論文発表申込み要領については6面を参照願います。

W・K・バルトン生誕150年記念事業の完了

本会監事 谷口 尚弘

2006年はわが国上下水道事業における大恩人であるW・K・バルトンの生誕150年の節目に当たる年でしたので、本会評議員である稲場紀久雄氏が記念事業の実施を提案されました。これには上下水道界は勿論のこと、その他にも多くの関係者の賛同を呼び、記念事業企画実行委員会が結成されました。

この事業には366人もの個人、60に及ぶ各種の団体や企業が協賛金を寄せてくださいました。国土交通省、厚生

労働省、英国大使館などとともに日本下水道文化研究会も後援団体に名前を連ねました。

記念事業は昨年5月の東京及び9月にはスコットランドで各種行事が開催されました。英国での記念行事出席のため、団員を公募し、日本側から日本環境衛生センター小林康彦理事長を団長として11名からなるデレゲーションを派遣しました。当代表である酒井彰さんを始め団員のほとんどは当会メンバーの人達でした。また、バルトンの

玄孫のケビン・メッツ氏も米国から参加されました。スコットランドで印象的だったことは、稲場紀久雄さんの講演、同夫人である日出子さんが丹精込めて作られた展示品、ケビンの津軽三味線の演奏がスコットランドの人々に大きな感銘を与えたことでした。バルトン家の本拠地アバディーンでの講演会の折、参加者の一人が「ブラントンやグラバーのことは知っていた。しかし、われわれは地元の誇るべきヒーローを今日新たに知ることが出来た」と語っておりました。バルトンの日本における大きな功績が故郷であるスコットランドでほとんど知られていなかっただけに、今回の日本側からの情報提供と日本でバルトンが今でも尊敬の対象になっていることを伝達できたことは大変有意義なことであったと思います。

本記念事業では以下のことが実施されました。

- (1) W・K・バルトン生誕150年記念講演及び展示会
2006年5月13日(土) 東京都庭園美術館新館ホール
- (2) W・K・バルトン生誕150年記念墓参会
2006年5月14日(日) 東京都青山霊園
- (3) W・K・バルトン生誕150年記念講演会
2006年9月6日(水) アバディーン市タウン&カウンティホール
- (4) 水環境シンポジウム
2006年9月8日(金) ヘリオット・ワット大学 E・チャドウィック講堂
- (5) W・K・バルトン記念碑除幕式
2006年9月9日(土) ナピア大学クレイグハウス前
- (6) W・K・バルトン生誕150年記念講演会
2006年9月9日(土) ナピア大学記念講堂
- (7) W・K・バルトン生誕150年記念誌の発行
日英両国の賛同者、協力者、後援団体等に送付
- (8) W・K・バルトン記念碑及び管理基金の寄贈
記念碑及びその管理基金として1000ポンドをナピア大学に寄贈し、今後の管理を委譲した。

バルトン記念碑を英国側に寄贈したことをもって本記念事業は成功裏に終了しました。関係された方々の努力とご支援には心から感謝申し上げます。

また、本年5月12日(土)にはケビン・メッツ氏が来日されたことを機会に例年8月に当研究会が行っている「バルトン忌」を前倒しして青山霊園の墓前にて約20名の方々の参加を得て、記念会を実施いたしました。ここでもケビン(今年は友人の新田さ

んとデュオ)の奏でる津軽三味線によるスコットランド民謡が青山霊園の中で静かに響きわたりました。いつもながらですが、素晴らしい会でした。

バルトンに関する日英交流や従来から実施しております記念会等は当研究会が新たに基金を設置して引き続き実施することが去る5月に開催された総会で議決されました。今後も様々な企画が予定されますので、多くの会員諸兄姉の参加を期待しております。



バルトン墓前で津軽三味線を演奏するケビン・メッツさんと友人で津軽三味線界若手のホープ新田昌弘さん



2007バルトン記念会参加者

バルトン生誕150年記念誌お頒けします

W・K・バルトン生誕150年記念事業の一環で発刊された「バルトン生誕150年記念」誌は記念事業に賛同下さり、協賛金を拠出して下さった個人366人、企業・公益法人60団体に配布しました。残部が若干ありますので、実費頒布(2,000円=送料別)しますので、ご希望の方は、下水文化研究会の方へどうぞ。

内容は▽発刊のことば・ご挨拶▽記念講演会(東京)▽バルトンの生涯・年表▽スコットランド訪問

(アバディーン市およびエディンバラ市での行事)▽追記、となっており、バルトン研究の貴重な資料となるものです。(A4判、ハードカバー120頁)

※ふくりゅう50号でいったん記念誌頒布のお知らせ段階では、著作権者である実行委員会の了解が得られておりませんでした。実行委員会解散にあたり、本会でお引受けすることにいたしました。売上げは、今年の総会で議決し設立が決まった「バルトン記念基金」に繰り入れ、スコットランドとの交流に生かしてまいります。

第11回 日本下水文化研究会総会が開催されました

去る5月19日(土)例年どおり日本水道会館において、第11回総会が開かれました。出席者は委任状を含め138名でした。総会の第一部では、各分科会や支部活動の報告を行いました。尿尿・下水研究会分科会からは、施設見学会や例会、例会における講話内容の活字化とその普及活動について報告がありました。海外技術協力分科会からは、 Bangladeshでのエコサン・トイレの普及活動は3年間の地球環境基金による助成期間が終了し、イオン環境財団の助成が決定したこと、JICAの草の根技術協力事業の内定を受けていることなどが報告されました。また関西支部の報告からは、多彩な活動が発展的に継続していることがうかがえました。

第二部総会では、木村関西支部長が議長に指名され、11月開催の第9回下水文化研究発表会、W.K.バルトン記念基金の設立を含め、いずれの議案も、滞りなく承認されました。

(1)第1号議案「平成18年度事業報告の承認ならびに会員

の現況報告」

(2)第2号議案「平成18年度収入支出状況報告及び会計監査の承認」

(3)第3号議案「財産目録の承認」

(4)第4号議案「役員の変更」

(5)第5号議案「W.K.バルトン記念基金の設立」

(6)第6号議案「平成19年度事業計画及び予算」

(7)第7号議案「総会議事録署名人の選任」

総会后、前代表の稲場紀久雄評議員により「進めよう水制度改革水道行政三分割から五十年」と題して特別講演が行われました。稲場評議員は政府与党内ですすんでいる中央省庁の再々編成や自民党道州制調査会の動きを紹介し、こうした動きをチャンスとしてとらえ、水圏環境管理基本法を制定、水圏環境総合管理庁を創設して、縦割りになっているわが国の水行政を再構成し、流域単位の水管理を提案されました。また、制度実現に向けて広く国会議員に対する運動を行っていることを明らかにされました。

第45回尿尿・下水研究会例会報告 『途上国の下水道整備に関する段階的整備について』

平成19年3月31日(金)18時30分より、東京ボランティア・市民活動センターで開催された第45回例会では、本会運営委員の石井明男さんから、途上国における現実的な下水道整備手法について話題提供をいただきました。以下の記事は、石井さんご本人の執筆によるものです。

1. 途上国で下水道を敷設するには

途上国特にアジアには、人口が集積した大都市が多いことはご存知の通りです。その人口密集地で尿尿処理を行なうには、何が最終目標かによりますが、今回は下水道施設がよいのではないかとこのことを前提にして話を進めました。

一般的に下水道を整備するには、多額の費用と時間を要し、効果が現れるには処理場も管渠も完成していなければならないので、時間も掛かり豊かでない途上国において自力で下水道を整備するのは大変なことです。トイレについては、安価で現地でも製作できるものにしてどうか、様々なアイデアがありますが、途上国が自力で下水道を整備しようとすると、はたと考え込んでしまいます。

私が1992年ごろJICAの廃棄物の専門家をしていたときに、同僚の下水道専門家は、下水道の導入にあたって①経済的問題、②技術的問題、③制度的問題、④市民の意識の問題などの壁に苦労されていました。

2. 過去の下水道敷設の推進力となったものは

日本における近代下水道建設のきっかけとなったのは、明治初期のコレラの蔓延だといわれています。しかし現在は途上国といえども、生水は飲まないなどの衛生知識が定着し、医療も発達しているので、下水道がないからといっても疫病が爆発的に広がることはないと思います。

下水道がなく、し尿で河川が汚染されていても、生まれたときからそのような環境にいればそれほど深刻になる人もいません。このようなところでは、衛生教育から

入らざるを得ないので、ゴールはとても遠い気がします。必要性が理解されていない国で、財政的なダメージが少ない方法で下水道を敷設しなければなりません。

下水道利用の先輩国としては、これらのことをよく考えた上で技術援助を実施しなければ、住民にも理解されないし、やるのも大変です。

3. 下水道の段階的整備

その壁を少しでも低くするアイデアとしては、「下水道の段階的整備」というアプローチがあります。私は、段階的整備を取り入れJICAで実施した、インドネシア国ウジュンパンダン市の「下水とごみ開発計画」(1995年)の結果を、その後もずっと考え続けています。段階的整備とは、トイレをいくつかまとめてセプティックタンクにつなげて、それをまた、幹線につないで最後に処理場につないで効果を出しながら徐々に完成させるというやり方です。

4. 何故、段階的整備が普及しないのか

この日議論されたことは、

- 段階的に整備することはできると思うが、この手法だと安く建設できるというのは幻想ではないか。二重投資は避けることにして、効果を出しながら建設していくだけにとどめるべきではないか。しかし、費用が安くならないと理解が得られないかもしれない。
- はじめから大規模に始めないで小さな区域に限定し、何とか推進するのが良いのではないか。とにかく実施して効果を実感させることが現実的ではないか。
- 段階的整備の手法には大きな間違いはないと思うので、そのまま推進したらどうか。ただ、複雑なので分かりやすい説明を考えて、理解を得るようにするのが良いのではないか。
- 住民への環境教育が先で、民意が熟してから始めるの

が良いのではないか。効果的な住民への説明方法があるのかが課題である。

- 段階的といっても順序が重要ではないか。このやり方だと時間がたつて都市がさらに巨大化して、そのときにはもう幹線も敷設できず、処理場用地も確保できず、結局手遅れにならないか。

等でした。
一般論を語るのは難しいことですが、どの都市でもすべての障害条件があるわけではありません。ひとつひとつの都市の経済状況、市民の衛生観念の度合い、都市の発展の状況を考えて活路を見出しながら計画して行く必要があると思います。

第46回尿尿・下水研究会例会報告 『バングラデシュでエコサン・トイレを作る』

平成19年6月1日(金)18時30分より、東京・飯田橋の東京ボランティア・市民活動センターで第46回尿尿・下水研究会例会が開かれました。今回のテーマは「バングラデシュでエコサン・トイレを作る」です。地球環境基金の助成金を受けて3年前からバングラデシュで実施してきたエコロジカル・サニテーション(エコサン)トイレの導入活動について、本会代表の酒井彰氏に活動の意義と経緯を話していただきました。以下はその骨子です。

- ① 背景：バングラデシュではトイレを持たない人口が20%、あっても非衛生状態のトイレを使用している人口が40%。また、現地で普及しているピットラトリンも持続可能なものではなく、衛生的な管理がなされていないものが多い。一方、多年にわたる化学肥料施肥により農地の土壌疲弊が著しい。
- ② 今回、建設・導入したトイレ：尿尿を農地への肥料、土壌改良材として活用することを目的とした、尿尿分離型トイレ。2系統を半年毎に交互使用。排便の都度、灰をまぶす(pHを上げ、殺菌効果をもたらす)。尿は適時汲取り農地や果樹にまく。大便是半年間の乾燥期間を置いた後に取り出す。乾式のため排便後の洗浄水は便槽に入れない。黒色のさらさらした乾燥した便となる。
- ③ コミラ地区に15基、スリナガル地区に25基建設。オーナー意識をもって管理してもらうため、個人の家庭用

- ④ 利用者は、ワークショップで指導したとおりに使用。その結果、臭いが少なく、ハエの発生もわずか。
- ⑤ 尿は化学肥料と大差ない施肥効果(キャベツなどの葉物野菜に対して)があった。
- ⑥ 良好な乾燥便が得られ、土壌改良材として牛糞以上の効果(オクラに対して)があった。寄生虫卵などの検査を実施し安全性の確認を行ったが、寄生虫卵には死滅しない。そのため、施用(有機物の補給)にあたっては土壌で覆土し風で飛散しないよう指導した。
- ⑦ これまで捨てられ環境汚染をもたらしてきた尿尿を土づくりに活用することへの認識は、現地でも広まってきた。肥料確保は世界的なリン資源枯渇、窒素肥料の主たる原料がエネルギー源である天然ガスであることから近い将来必ず困難になる。
- ⑧ このトイレに共感した地域では、自分たちで全額負担してでもこのトイレを造ろうという動きが出てきており、支援の対象としていきたい。
- ⑨ 政策提案：ピットラトリンの普及は第1段階(決められた場所での排泄習慣の普及)、エコサントイレは次のステップの技術として位置付ける。第2段階では、排泄だけでなく尿の衛生管理、資源利用、地域ニーズへの対応が必要になる。

(尿尿・下水研究会事務局)

『江戸下水の町触集』の訂正

(著者：栗田彰さんより)

昨年12月に、下水文化叢書第9号として、当会より刊行していただいた拙著『江戸下水の町触集』に、下記のとおり、誤りがありました。原稿が出来上がり、念には念を入れて、「もう大丈夫」と思って印刷屋さんへ原稿をお渡ししたのですが、刷り上がって見ましたら、まだまだたくさん誤りがありました。まことに申し訳ない次第です。どうぞ、下記により訂正をしていただきたくお願い致します。

「目次」 [十六] 万治の振り仮名「まんじ」を削除。 [八十五] 正徳の振り仮名「しょうとく」を削除。 [九十五] 元文の振り仮名「げんぶん」を削除。「御触によく出てくる用語の簡単な解説」「ひろこうじ」のうち、「両国広小路」の、中央区東日本橋二丁目内の「目」を脱字。「本文」52ページ10行目「明五ツ時」の「明」の振り仮名は、「あけ」ではなく「みょう」。「明日」の意。68ページ後ろから5～6行目「契約書」は「売買証文」。後の「売券状」の「註」と整合すべきでした。76ページ最終行 文京区水道二丁目の「文京」と「区」の間をツメル。85ページ12行目「見物してはてけない」は「見物してはいけない」。96ページ6行目「相心得え」は、「相心得」。101ページ後ろから2行目「神田鍛冶町一、二丁目内」は、「神田鍛冶町二丁目内」。119ページ8行目【註】の見出し。「尤も」は、「・尤も」。123ページ8行目「現在の渋谷川の麻布近辺の俗称。」は、「現在の古川の麻布近辺の俗称。渋谷川は天現寺橋付近から下流を古川と称する。」124ページ後ろから4行目「現在の渋谷川の、麻布近辺の俗称。」は、「現在の古川の麻布近辺の俗称。渋谷川は天現寺橋付近から下流を古川と称する。」143ページ後ろから3行目 行頭の「り」を前の行の「若下水埋」の後に続ける。167ページ最末行「出るべきことなど」は、「出るべきことなど」。218ページ2行目「家屋では」の後に、次行の「なく、」以下が続く。224ページ3行目「たてまつり」は、「奉り」。260ページ2行目「仮の囲い。」の、「仮の囲」と「い。」の間をツメル。312ページ6～7行目「猿若街」は、「猿若町」。

旧事九官録 巻2

トイレット部長の事

本会運営委員 森田英樹

「今度、『トイレット社員』とか言う白黒の古い映画をテレビでやるよ」突然職場の同僚からもたらされた衝撃の情報であった。しかも彼は夜中にうとうと、テレビを見ていたときの記憶のため、それ以上の手掛かりなし。この情報を聞いたのは1月9日のことであった。『『トイレット社員』?』聞いた事がないが、立場上?見ないわけにはいかない。さっそく調べたところ、正しくは『トイレット部長』。番組内容を見ると「国鉄本社の営繕課長笠島昇の仕事は、国鉄の各駅トイレットの維持改善である。妻の友子は夫の話題がトイレの事ばかりでうんざり、息子の稔は近所の子供から…」目に飛び込んで来た『国鉄』『トイレット』『部長』の3文字。これは間違いなく『トイレット部長』の著者藤島茂氏の映画に違いない。何としても見なくては行けない。放送日は…1月9日16:30～なんと、なんと、あと1時間後。しかも放送局は聞いたこともない『衛生劇場』。どうしてよいやら、ただ慌てふためく私の姿に、これまた他の同僚がすぐに再放送の予定を調べてくれた。29日に再放送されるとのこと。ホッと安心。『衛生劇場』ならウチで録れますよ。他の2人の同僚が録画を立候補してくれた。この間わずか十数分。本当に感謝感激、衝撃的な1日であった。

ところで、主人公の藤島茂氏の事であるが、国鉄のトイレ改善に取り組んだ『トイレット部長』著者であること以外は、お恥ずかしながらほとんど知らない。急ぎ帰宅し、手元の藤島氏の著書4冊を捲り改めて経歴を見ると、1917年生まれ。1941年東京大学建築科卒業と同時に鉄道省に入省。戦後国鉄本社施設局建築課課長補佐として駅舎の設計営繕を担当し、技師長室調査役、大分鉄道管理局長を経て1966年外務部長となる。1969年国鉄を退職。国際観光振興会理事とある。専門は旅客駅の設計で「駅前広場計画論」で工学博士の学位を得ている。著書は『トイレット部長[1960]』『トイレット監督[1961]』『遠い汽笛[1969]』。第1作の『トイレット部長』は文藝春秋に『臭くも長い物

語 駅の便所から見た世相百態』として連載したものを1冊にまとめたもので『トイレット監督』はその続編である。

このように藤島氏の経歴を見ておわかりのように、トイレット部長という肩書はない。そのタイトルの由来は『国鉄はおそらくわが国でもっとも便所をたくさんもっている企業だろうから、これを専門にやる部ぐらいはあってもよかろうと思って「オレは駅便部長になるがいいか」といったら、家内は一瞬かんがえて、「そうね、トイレット部長ならいいわ』とその経緯を記している。

さて、映画『トイレット部長』のその後であるが、録画を手に入れるまでの20日間は実に長かった。その間に私の頭の中では、「これで、『トイレット部長』の全て、藤島氏の生涯がわかる」と勝手に妄想は膨らみ続け巨大化し、あたかもNHKのドキュメンタリー番組を見るかのような期待感が高まり続けていた。コメディに分類されている映画であることをすっかり忘れ…。

気になる、あらずじ等は、私の下手な要約はやめて、MovieWalkerなどをご参照願いたい。筧正典監督、松木ひろし脚色の東宝映画である(製作年:1961)。キャストは、笠島昇に池部良、妻友子は淡路恵子である。

後日、本会の平田純一氏に伺ったところ、藤島茂氏は藤島亥治郎氏の甥御さんにあたる人との事であった。藤島亥治郎氏は東京帝国大学工学部建築学科教授。1937年発行の名著『近世便所考』に「西洋歴史」と題する論文を掲載している。確かに同姓ではあったが、私には御二人は関係は全く結び付いておらず、晴天の霹靂であった。その後、藤島亥治郎氏に関して調べたところ1899年生まれ、2002年没。享年103歳。実に19世紀から21世紀まで3世紀にわたる生涯を送られた方でした。

私にとっては、なんとも衝撃の情報ではじまり、衝撃の情報で終わる『トイレット部長』であった。

2007年東京水道水源林の父(中川金治翁)を偲ぶ会のお知らせ

主催：中川神社奉賛会、後援：日本下水文化研究会

中川神社改築に際しましてはご尽力をいただきまして、心より感謝申し上げます。毎年開催してまいりました偲ぶ会も回を重ねて、今年5周年を迎えます。記念すべき年にあたり、稲場紀久雄氏(大阪経済大学教授)による『特別企画 村に伝わる秘話紙芝居(集成版)』上演と地元「猟友会」献上の“山の幸”(熊・鹿・猪…)のご馳走が予定されています。多数のご参加をお待ちしております。

記

前夜祭 10月20日(土) 午後5時30分～8時30分

於 民宿「たちばな館」(山梨県北都留郡丹波山村2578 TEL0428-88-0308)

参加費 7,000円(一泊二食と翌日のおにぎり付き、交通費別途。)

翌日21日記念登山を行います(有志)。午前8時～12時

コース：サオウラ峠の中川神社往復(一部モノレール乗車可)、下山後丹波山温泉

「のめこい湯」入浴したのち解散

※ 八王子駅(20日10時北口タクシー乗り場集合)より現地までの交通手段は準備します。参加人数により交通手段は異なりますが、応分の負担をお願いします。応募者20名以上の場合にはバスを用意します。

※ 参加ご希望の方は下記まで、住所、氏名、連絡先、をお知らせください。(申し込み締め切り8月31日)

※ お問い合わせ、申込みは 藤森正法さんまで(自宅TEL&FAX:03-3801-4848、携帯090-4132-5501)



中川神社の祠

下水文化研究発表会・論文の募集要領

(1) 発表の申込

発表希望者は、次の要領で発表申込をしてください。発表申込は論文提出ではありません。なお、論文は、概ね1,600字×6ページ程度とご承知おきください。

(2) 提出書類：同封の発表申込書を郵送、FAX、e-mailで提出してください。発表申込書はホームページからもダウンロードできます。（「ふくりゅう」を電子メールで送らせていただいている会員諸兄姉はダウンロードをお願いいたします）折り返し、はがき、FAX、e-mailで受領の旨通知致します。

(3) 申込書の作成要領：申込書の書式にしたがって下記を記入してください。

- タイトル
- 著者名・所属（共著者を含む）
- 要旨：日本語400字以内
- キーワード（5つ以内）
- 発表分野：発表分野をお選びください。発表プログラム作成の参考にさせていただきます。
- 連絡先（共著者がある場合は代表者）

(4) 申込締切：2007年8月20日（月）必着

(5) 論文作成要領の送付

応募いただいた方には論文作成要領を8月中に発送致します。論文ではタイトル、著者名、所属、キーワードは日本語、英語両方でお書きください。また、可能な限り200語程度の英文要旨をお付け願います。なお、応募された論文要旨から、宣伝的なもの、個人を誹謗することを目的とするものと運営委員会が判断した場合には、発表をお断りすることがあります。

(6) 論文の提出締切：2007年10月1日（月）必着

(7) 発表形式：口頭発表、発表では、プロジェクター（パワーポイント）、OHPが使用できます。

(8) 研究発表会参加申込方法など

研究発表プログラムが確定してから10月中に発行予定の会報でご案内致します。研究発表会当日までに発表者・参加者へ講演集（有料）を送付する予定です。

応募・論文提出先

〒162-0067 新宿区富久町6-5 NJS 富久ビル別館

NPO 法人日本下水文化研究会 事務局

TEL & FAX: 03-5363-1129

e-mail: jade@jca.apc.org

ホームページへの記事・写真を常時募集しています

本研究会では、本部活動ならびに分科会の活動状況を、会員ばかりでなく、下水文化に関心をお持ちの一般の方々に広く知っていただき、下水文化に関連する情報源となるよう、昨年3月、ホームページをリニューアルしました。

（関西支部は、別途ホームページを開設しております。）

ホームページの役割は、常に最新の情報を提供することにあります。それがアクセス数の増加に反映され、ひいては本研究会の存在の周知度を上げることとなります。

つきましては、ホームページへの投稿を常時募集しておりますので、活動予告、活動報告、あるいは例会や行事に参加された感想

などをお寄せください。また、ホームページには活動報告のコーナーばかりでなく、紀行文、随筆を主体とした「読み物コーナー」やホットな写真・お宝写真を掲載する「コーヒーブレイク」の欄もありますので、個人的な活動から得られた情報も大歓迎です。

ホームページへの投稿は、原則、デジタルデータとしておりますが、ペーパーに打ち出したものでもかまいませんので、遠慮なく投稿してください。

投稿のあて先は、ホームページ担当の小松建司さん宛て、dhki501_1@hotmail.co.jp へお願いします。郵送、FAXの場合、下記の本会事務所（小松さん宛て）でお願いします。

第47回 尿尿・下水研究会例会のご案内

研究会所蔵ビデオを上映します。

日時：9月26日（水）18時30分～

場所：東京ボランティア・市民活動センター B 会議室（飯田橋・セントラルプラザ10階）
JR、地下鉄 飯田橋駅 徒歩1分 電話：03-3235-1171

- ① トイレに関する手作りビデオ（大友慎太郎氏製作）
- ② 常滑焼きの歴史に関する講話（中野晴久氏、ビデオ製作：石井明男氏、関連資料作成：地田修一氏）
- ③ とこなめ歴史発見（柿田富造氏原作、常滑ケーブルテレビ製作）

運営委員会・事務局より

● 4年ぶりで東京で下水文化研究発表会を開催します。今回は、できるだけ発表時間を確保し、また、聴けない発表を少なく、すなわちあまり部屋を分けない方針で臨む方針です。日頃の成果をじっくりと話したい方、聴きたい方の参加を期待しています。

編集後記 研究発表会のご案内、総会や分科会例会の報告など、本号は文字ばかりとなってしまいました。ホームページと「ふくりゅう」が、それぞれの特徴を生かしながら、より広く会員の声を汲取れる情報の媒体となっていけたらと思います。（酒井 彰）

「ふくりゅう」では、原稿募集をしております。「水」について思うこと、身近な話題、会に対するご意見やご提案、どのようなことでも結構ですから事務局までお送りください。

ふくりゅう 通巻52号おもな目次

| | |
|----------------------|---|
| 第9回下水文化研究発表会ご案内 | 1 |
| バルトン生誕150年記念事業の完了 | 1 |
| 第11回総会報告 | 3 |
| 尿尿・下水研究会例会報告 | 3 |
| 旧事九官録巻2 トイレット部長の事 | 5 |

特定非営利活動法人 日本下水文化研究会

〒162-0067 新宿区富久町6-5 NJS富久ビル別館3F

TEL & FAX 03-5363-1129 e-mail: jade@jca.apc.org

ホームページもご覧ください

<http://www.jca.apc.org/jade/index.htm>

関西支部 <http://www1.kcn.ne.jp/~k-atsumi/>